悪夢の終結

遠野ましろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪夢の終結

【Ｎコード】

Ｎ９７７６Ｒ

【作者名】

遠野ましろ

【あらすじ】

２０１１年３月１１日、東京で地震に遭った夫婦の物語。数日後、眠れぬ夜を過ごす妻に夫が語る一幕。

「ごめん、起こしちゃった？」

ベッドに戻ると彼は顔を起こした。少し肌寒い。布団はあたしが起きたままの形に保たれている。

「来い」

それを持ち上げた彼の胸に飛び込んだ。

温かい。

包む腕、頭をくるむ手のひら。額に当たる心拍音。

「泣くのなら、俺の前で泣け」

「泣いてない」

「今にも泣きそうな顔をしている。見せてみろ」

体を少し離されると顎を掬われて、

「言わんこっちゃない」

多分あたしは弱っている。

少しの音にも敏感になって。

船酔いみたいな状態が続いて。

何度も夜に目が覚めて。

定まらない。

世界が恐ろしい方向に動いているのに、あたしは何もできず。

入りくる情報、信じられない映像。言葉を失う現実と向き合う度、無力を噛み締め。

一番苦しいのは、

「助かった、って思ってる自分が、情けなく、って」

無言で拭い続ける真っ暗な瞳は、醜悪を映す。自己嫌悪に満ち、悲劇に酔う女を。

あたしの頭をぽん、と撫でると一息ついた。

「生への執着が恥ずかしいことだとは思わない」

「ひぐっ。蒔田、さ」

まつげの雫を掬うと困ったように眉根を寄せる。「地震が起きた日、俺が何を考えていたか、分かるか」

あたしは首を振った。言葉少なな彼は、二十階のビルに居た、結構揺れたと話しただけで。

「真っ先に浮かんだのは、ショコラだった。一人、震えているのではないかと」

最初に愛犬の名。そこは少し違う答えが来ると期待したのに。

表情だけで内面を読みとったのか、

「次に思うのは、お前だった」

今までに一度も経験したことのない、大きな揺れだった。端末を気にする人間には、いいから机の下に潜れと命じた。

終わったと思い、立ち上がれば、また地面が波打つ。蹂躙するように夕刻を過ぎても続いた。

眩暈を起こす者、うずくまり、もどす者も出るほどだった。

丈夫な者に介抱を頼み、周囲の確認。外部連絡。待機ののち避難、誘導。一連に考えを及ばせてはいたが――

頭の中に、常にお前があった。

会わずに死ねるかと思った。這いつくばってでも必ず帰ると思った。

「他の安否を確認しながらも、俺は。てめえが生き抜くことを考えていた」

交通手段を絶たれた彼は、六時間を歩いて帰った。停電の、闇が覆う街を一人。

日頃から鍛えてるから大したことはない、と言ったけれど、強がりなのは見るに分かった。

「歩ける足があるなら歩く。立ち上がれる脚力があるから立ち上がる。復興は、手段も力も備えた人間の仕事だ。生き残った者がやらなければならない。救わなければならない。少なくとも、自分自身を」

一息に語る彼は天井を睨むように見据え、

「諦めることはいつでも出来る。だがな、信じるのはいまやらなきゃいつやるんだ」

自分に言い聞かせているように思えた。

あたしは、そんなに強くなれない。

首を振ると、新たな涙が伝う。戻り来た彼は頬を挟み、

「お前がいるから、強くなれる」

あたしの前髪を掻き分ける、優しい指先。

「お前が息をしていることで生きていると感じる。泣くのを見ると、強くあらねば、と思う。笑っていることに俺は癒される。なぁ」

一拍置いて、

「当たり前がこんなにも大切だったとは知らなかったぞ」

切なげに細まる瞳に、あたしの目から反射的に涙が溢れた。

「あんまり泣くと腫れるぞ」

唇で吸い取るものだから、余計に止まらない。

「ねえ、蒔田さん」

なんだ、と言いながら今度は鼻先を口づける。

「落ち着いたら子ども、作ろっか」

やや白目を大きくしたと思ったら、

「今すぐでも構わないんだぞ」

かすれた囁き。素早くまさぐる右手を、やだ、も、と叩くと彼は声を立てて笑った。

「その顔が、見たかった」

ぶー、とむくれると尚更肩を震わせる。ほっぺたを人差し指でつついてぷしゅう、と空気抜かしといてまた口許を綻ばせる。

「遊び過ぎです、一臣さん」

「寝るぞ」

鼓膜に感じる鼓動。包み込む体温。

泥のような眠りに落ちていきながらも、きっとあたしは笑顔だった。

聞こえたのだと思う。

どんなお前でも求めている。俺の、全てが。

（後書き）

別サイトの『愛の日常』より転載。
２０１１．４．１２タイトル「どんなあなたでも求めている。あたしの、全てが。」より改題。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9776r/

悪夢の終結

2011年4月14日00時58分発行